H-1

アミ語の -ay における名詞、動詞、認識モダリティの関連

いまにしかずひろ
今西一太（imanishik923@gmail.com）

広島大学

1. はじめに

本発表ではアミ語[1]の接尾辞 -ay の意味と品詞について、談話データからとりだした形式をもとに分析する。接尾辞 -ay は動詞に付いてその動詞にある意味を付け加えるが、その付け加わる意味の解釈はこれまで研究者によって何種類か違ったものがなされている。

まず、Lin は -ay を名詞化接辞と解釈している（Lin 1995: 164-5、強調は発表者）。

(1) a. U=**mifanaw-ay** kaku tu=kaysing. 「私が皿を**洗った人**だ」[2]
PRE=洗う-AY 私.NOM ACC=皿

b. U=**mitafu-ay** ku=**matu'as-ay** tu=futing. 「その**年寄り**が**魚を詰めた人**だ」
PRE=詰める-AY NOM=年を取っている-AY ACC=魚

c. Cima ku=**minanum-ay**? 「水を飲んでいるのは誰？」
誰 NOM=水を飲む-AY

mifanaw、mitafu、matu'as、minanum は動詞であり、それぞれ「洗う」「詰める」「年を取っている」「水を飲む」という意味を表す。その動詞に -ay がついたことにより、「洗った人」「詰めた人」「年寄り」「水を飲んでいる人」という人を表す名詞化が起こっているという解釈である。Lin はその根拠の一つとして、名詞と同じように格標示（ku= など）を受ける点などを挙げている。

次に、Wu (2003) では同じ接尾辞を名詞化接辞ではなく、認識モダリティを表す接辞であると述べている（Wu 2003: 66、強調は発表者）。

(2) a. **Mikilim-ay** kaku ci-panay-an. 「私は**確かに**パナイを**探した**」
探す-AY 私.NOM ACC-パナイ-ACC

b. **Kimulmul-ay** ku=cidal. 「太陽は**（事実として確かに）丸い**」
丸い-AY NOM=太陽

---

[1] アミ語はオーストロネシア語族に属する言語で、台湾の東部海岸沿いに住むアミ人によって話されている。アミ人自体は 20 万人近くいるが、40 代～50 代以下の世代はアミ語を流暢に喋ることが出来ない事が多く、実際の母語話者は民族数の半分以下である。文字表記で注意を要するものは以下：<e> = [ə]、<c> = [ʦ]（ただし<i>の前で[ʨ]）、<s> = [s]（ただし<i>の前で[ɕ]）、<y> = [j]、<d> = [ɬ ~ ɮ]、<’>=[ʔ]、<u>=[u ~ o]、<i>=[i ~ e]。本稿で用いる例文のうち、出典を明示していないものは全て著者自身がアミ人の調査協力者（台東県長濱出身の中部方言話者）から得たものである。本稿のデータはアミ語中部方言のデータであり、他の方言であれば違う分析結果となる可能性がある。略号は以下の通り：PRE: 述部、NOM: 主格、ACC: 対格、GEN: 属格、LOC: 場所格、NEG: 否定、PFV: 完了相、LNK: リンカー、N 解釈: 名詞化としての解釈、V 解釈: 動詞的意味での解釈。本稿のグロスは主張の趣旨に関係の薄い形態素分析をあえて行わない形で書いてある（動詞の態など）。

[2] アミ語は無標の語順で述部が文頭にくる言語であり、動詞は基本的に文頭に立つ。u= は述部に名詞が来た際に必要となる述部標識であり、動詞にはつかない（(4) 参照）。また本発表の形態素分析とグロスは全て発表者のものであり、引用の際も発表者の分析を示し、グロスを付けている。

(2) では mikilim 「探す」、kimulmul「丸い」という動詞に -ay がついている。Wu によるとこの場合、「確かに」「間違いなく」「事実として」というニュアンス、つまり事実であることを断言する認識モダリティが動詞に加わる、とのことである。その証拠に、(2)b においては -ay を省略できない、ということなどを挙げている。

最後に今西 (2018) は、聞き取り調査をもとにした分析と上記 Lin および Wu の解釈をもとに、-ay は名詞化を表す場合と事実を断言する認識モダリティを表す場合の両方があり、述部に来た場合は同じ文章で二通りの解釈が可能である場合もある、と述べている。

(3) (U=)**rumadiw-ay** cingra. 「彼は歌手です（N 解釈）／彼は今確かに歌っている（V 解釈）」
(PRE=)歌う-AY 彼.NOM

さらに今西は接語 u= の用法をもとに、この -ay がついた語の品詞について、Lin のように名詞でもなく、Wu のように動詞でもなく、その中間の品詞「名動詞」であると解釈している。すなわち、u= は (4)a のように述部に名詞が来た場合は必須であり、(4)b のように動詞が来た場合は絶対に現れないのだが、(3) のように -ay がついた語が述部に来た場合は**あってもなくてもよい**（(3) では括弧で示してある）という現象があるため、この語は名詞と動詞の中間的な品詞である、と述べている[3]。

(4) a. **U=singsi** kaku 「私は先生です」（u= は絶対に必要で、述部は名詞）
PRE=先生 私.NOM
b. (*U=)**Mapatay**=tu cira 「彼は死んだ」（u= は絶対につかず、述部は動詞）
(*PRE=)死んだ=PFV 彼.NOM

本稿では以上の背景を元に、アミ語の談話データを活用して -ay の含まれる語が述部に現れている例を抽出して、意味と形式を分析する。その結果、以下の 3 点を主張する。

[1] 談話内で分析をしても、今西 (2018) の聞き取り調査での解釈と同様、述部においては「～する者である」「確かに～する・した」の両方の解釈が可能で、両者を明確に区別することが難しい場合がある。

[2] u= が現れる場合は **NV 解釈どちらも可能**、現れない場合は **NV 解釈どちらも可能**または **V 解釈のみ可能**である。また、-ay のついた語に談話の中の人や物を指し示していない場合は **V 解釈のみ可能**である。つまり、u= があったり指し示す人や物があったりすると名詞的解釈が優勢となる。

[3] 他のオーストロネシア語を見てみると、名詞と動詞の明確な区別がつきづらい例は多数報告されている。しかし、アミ語のように名詞と動詞の区別が明確につき、さらにその中間の品詞が設定できたうえで、その品詞において N 解釈と V 解釈の両方が可能であるような例は管見では報告がない。

2. データ

本発表で扱うデータは、発表者が 2008 年 9 月 26 日に台湾台東県長浜において当時 70 歳代のアミ語話者 A 氏（台東県長浜出身、在住）から音声で記録に残し、A 氏ともう一人別のアミ語母語話者の協力のもとに文字化したものである。2 回分に分けて録音してあり、2 つの合計時間は 34 分 38 秒。

談話のテーマは 1877 年に実際に起こった「大港口事件」という、アミ族と清軍の軍事衝突についてである。当時清軍がアミ族の住む地域に進出してきており、それに対抗してアミ族と軍事衝突があったこ

[3] 今西はこの「名動詞」について、-ay のついた語の他に 17 種類を挙げている。

とがあった。その際に活躍した英雄（実在の人物）「カフォオク」について、子供時代の逸話から軍事衝突で死に至るまでとその後日談を語ってもらった。

3. -ay のついた語が述部に来ている例

この節では、前節で述べた談話において、-ay のついた語が述部に現れる例をすべて挙げる。その際、文脈などから考えて、N 解釈と V 解釈のどちらが可能であるかも付記する（あくまで発表者の判断で解釈が可能かどうかを示しているだけであり、実際に話者がどちらの解釈で語っていたかは不明）。

(5) **Pacawi-ay**. **U=matira-ay** ku=caciyaw. （1-'1"42）
答える-AY PRE=そのように-AY NOM=言葉
「（彼は）**答えた**(V)。言葉は**そんな感じだった(V)/そのようなものだった(N)**」

(6) U=**manguta-ay.** Manga'ay=tu satu kura=wawa. （1-'6"20）
PRE=濁っている-AY 良い=PFV と NOM(その)=子供
「（水は）**濁っている**(V)/**濁っているものだった(N)**。（それでも）よいとその子は思った」

(7) **Tingalaw-ay**=tu ku=sarakat niparu'an nira sa. （1-'6"30）
きれい-AY=PFV NOM=はじめに 入れられたもの 彼女(GEN) と
「自分が最初に入れたの（水）は**きれいだ(V)/きれいなものだ(N)**、と」

(8) U=**caluway-ay** ku=mama nura=tamdaw sa. （1-'6"59）
PRE=足が速い-AY NOM=父 GEN.それ=人 と
「その人のお父さんは**足が速い(V)/足が速い人だ(N)**、と」

(9) **Su'elin-ay.** 「**本当だ/本当に(V)**」（3 回：1-'7"03, 2-'14"33, 2-'17"15）
本当だ-AY

(10) N**atahira-ay**=tu hakini?「一体**到着した(V)**のかい？」 （1-'7"36）
到着した-AY=PFV 一体

(11) **Su'elin-ay** piliyawan ku=cidal. （1-'7"53）
本当だ-AY 日が傾く NOM=太陽
「**実際に(V)**太陽が傾いた」

(12) U=**hatira-ay** ku=cikay nuna=wawa. （1-'8"09）
PRE=このように-AY NOM=走り GEN.これ=子供
「この子供の走りは**こんな感じだった(V)/こんな感じのものだった(N)**」

(13) U=**mipaliwal-ay** tu=lala tu=maan a laludidan nu='amis. （2-'1"35）
PRE=売買する-AY ACC=鍬 ACC=何 LNK 物 GEN=アミ族
「（その男は）小さな鍬、アミ族の色々なものを**売買していた(V)/売買する人だった(N)**」

(14) U=**ira-ay** ku=tamdaw itira i-makutaay sanay. （2-'2"29）
PRE=いる-AY NOM=人 あそこ LOC-マコタアイ 言う

「あそこのマコタアイに人が**いる(V)**らしい/マコタアイに**いる人だった(N)**らしい」

(15) **Matalem-ay**=tu kira=kira=funus. 「その刀は**鋭かった(V)/鋭いものだった(N)**」 (2-'4"01)
鋭い-AY=PFV NOM.それ=NOM.それ=刀

(16) U=**cahu-ay**=hu kasafunus kira=funus. (2-'4"09)
PRE=NEG-AY=まだ 刀を使う NOM.それ=刀
「その刀はまだ使ったことが**なかった(V)**/使ったことが**ないものだった(N)**」

(17) M**atalem-ay**=tu kira han. 「それ(刀)は**鋭い(V)/鋭いものだ(N)**と言った」(2-'4"12)
鋭い-AY=PFV NOM.それ 言う

(18) **Sakucipungas-ay** hanima kura ... ci-Seratangay (2-'5"45)
確かちょんまげがある-AY だろう NOM.それ NOM-スラタガイ
「そのスラタガイには**確かちょんまげがあっただろう(V)/ちょんまげがある人だっただろう(N)**」

(19) U=**kakahad-ay**=sa matu-kakunah a samilingling kitanan. (2-'8"03)
PRE=広がる-AY=(様態) のように-蟻 LNK 近づく 私たち.ACC
「(やつらは)蟻みたいに**広がって(V)**私たちに近づいてくる/**広がって近づいてくるやつらだ(N)**」

(20) U=**hacikay-ay** kina=tamdaw macuruk. (2-'10"27)
PRE-速い-AY NOM.これ=人 一人ずつする
「この人は一人ずつする(叩く)のが**速い人だった(N)/速かった(V)**」

(21) **Anumasamaan-ay**=tu ku=nu-ruma a kaput, mafukil. (2-'10"49)
どのようにしている-AY-PFF NOM=GEN-他 LNK 組 知らない
「ほかの組が**どうやって(訓練)しているか(V)**は知らない」

(22) S**o'elin-ay** ngata ngata=sa kura='ayaw ... kura=rumi'ad. (2-'15"15)
本当だ-AY 近づく 近づく=(様態) NOM.それ=前 NOM.それ=日
「**実際に(V)**その前が…その日が徐々に近づいてきた」(kura='ayaw は言い間違い)

(23) **Ma'emin-ay** aca namu a mapatay kura=sefitay nu=kuaping. (2-'22"53)
全部する-AY だけ 私達.GEN LNK 殺される NOM.それ=兵隊 GEN=清国
「私たちがその清国の兵隊を**全員**殺**した(V)**」(直訳:私たちによって…**全員**殺**された**)

4. 分析

4.1. 述部標示 u= の有無と NV 解釈

まず、(1)b (1)c のように、-ay のついた語が格標示を受けている例(項になっている例)では N 解釈しかできない。次に、第 3 節の例で述部標示 u= がついている例を見てみると、V 解釈と N 解釈の両方が可能である例ばかりである。また、同じ第 3 節で u= 無しの述部を分析すると、NV 両方の解釈が可能であるか、V 解釈のみしかできない例である。

表 1: NV 解釈と項、述部の -ay の例

	項	述部	
		u=有	u=無
N 解釈のみ	○	×	×
NV 解釈両方	×	○	○
V 解釈のみ	×	×	○

4.2. 指し示す対象物の有無

前節の分析をさらに進めると、談話の中でその後が指し示す対象物としての人や物が存在するか否かで述部標示の有無や NV 解釈に影響がある例がある。

u= 無しの述部をさらに分析してみると、(9) (11) (22) のように su'elin-ay という例が 5 例あり、例外なく u= がついておらず、V 解釈しかできないことが分かる。この su'elin-ay という単語は、「本当に～をした人や物だ」という意味ではなく、全て「本当にこういうことが起こった」という意味で用いられている。(9) の 2 つ目と (11) (22)では su'elin-ay に続く文が実際に起こったという意味で用いられており、また (9) 他 2 例の前後では、それまでに述べた内容がひと段落したところで「本当にこういうことが起こったんですよ」という意味で su'elin-ay と述べ、次の場面に転換している（解釈の仕方によっては (22) もそのように捉えられなくもない）。ここからいえることは、su'elin-ay には談話の中に登場する人や物を指し示しているのではなく、話の内容、事態の発生自体に言及しているということである。

Hopper and Thompson (1984: 709, 710) は名詞の特徴として以下 (24) を挙げている。

(24) Prototypical N's, ..., introduce a participant of the discourse. ... From the discourse viewpoint, nouns function to introduce participants and 'props' and to deploy them.

この観点からみると su'elin-ay という語は指し示す discourse participant が存在していないために名詞性が下がることになり、その結果 u= の標示を受けていないと解釈することが可能である。

以上の分析をまとめると、項 ＞ u=有の述部 ＞ u=無しの述部（指示対象の人や物有） ＞ u=無しの述部（指示対象の人や物無し）の順番で徐々に V 解釈が優勢になっていっている。名詞の特徴（項になり格標示を受ける）から、動詞の特徴（u=無しで述部に立つ）までの特徴が、両者の中間に位置する品詞である「名動詞」により段階的に表れている。

5. 他言語との比較

台湾原住民やフィリピンのその他の言語を見てみると、アミ語の -ay と同じような現象は今のところ報告されていないようである。これらの言語でも（いわゆる）動詞と名詞が同形であり区別がつきづらい例は報告されているが、動詞と名詞と中間的な品詞や認識モダリティとの関連に関する報告は無い。例えばアタヤル語とタガログ語では、同じ形態が述部に立つと「～する」という動詞的意味に、項になると「～する人」という名詞的意味になる例が報告されている（Huang (2002)、塩原(2008)）。ツォウ語でも同様に、ある種の名詞化は動詞と全く同じ形態で起こることが報告されている（Chang (2002)）。また、ヤミ語でも形態的には名詞化と動詞の区別がつかず、語順で判断するしかない例が報告されている（Lau (2002)）。しかし、これらの例は全て「動詞と名詞の区別がつきにくい」という例であり、本稿で述べたアミ語の特徴、すなわち「動詞と名詞の区別は明確につくが、その中間の品詞があり、その品詞

が V 解釈（認識モダリティ付）と N 解釈の両方可能である場合がある」という現象とは異なる。

6. 結論

本稿ではアミ語の -ay の分析を行い、これが N 解釈と V 解釈、述部標示 u= との関連で名詞的特徴から動詞的特徴までグラデーションを作っていること明らかにした。表 1 は議論のまとめである。

表 2: 名詞・動詞と-ay のついた語の解釈分布

	名詞	-ay のついた語（名動詞）				動詞
	通常の名詞（項）	項	述部			通常の動詞（述部）
			u=有	u=無・指示有	u=無・指示無	
N 解釈のみ	○	○	×	×	×	×
NV 解釈両方	×	×	○	○	×	×
V 解釈のみ	×	×	×	○	○	○

※「指示有」「指示無」とは「談話において指し示す対象としての人や物の有無」を表す

今後の課題としては談話データを増やし、さらに聞き取り調査をすることにより、以下の問題に答えていく必要がある。

・話者自身が N 解釈と V 解釈のどちらで言っているととらえているかを調べる
・談話データと例を増やし、「談話内の登場人物などを指示していない」という特徴が本当に u= の有無と関係があるのかを確かにする
・今西 (2018) に挙げてある -ay 以外の名動詞に関して、本稿と同様の分析が可能かどうかを検討する
・諸言語によく見られ、アミ語にも存在する、「動詞-形容詞（状態動詞）-名詞」という連続体（cf. Croft (2000)）と表 2 の連続体との関連を調べる。

参考文献

Chang, Melody Ya-yin (2002) "Nominalization in Tsou." *Language and Linguistics* 3, 335-348.

Croft, William (2000) *Radical construction grammar: syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1984) "The discourse basis for lexical categories in universal grammar." *Language* 60, 703-752.

Huang, Lillian M. (2002) "Nominalization in Mayrinax Atayal." *Language and Linguistics* 3, 197-225.

Lau, D. Victoria. (2002) "Nominalization in Yami." *Language and Linguistics* 3, 165-195.

Lin, Hsueh-o M. (1995) "Two Amis suffixes: -ay and -an." *Studies in English Literature and Linguistics* 21, 159-173.

Wu, Joy Jing-lan (2003) "Clausal modifiers in Amis." *Studies in English Literature and Linguistics*, 29, 59-81.

今西一太 (2018)「アミ語における『名動詞』: 名詞と動詞の中間的な振る舞いをする語群について」*Language and Linguistics in Oceania* 10, 33-43.

塩原朝子 (2008) 「タガログ語の『動詞』と『名詞』の区別」*Asian and African Languages and Linguistics* 3, 97-115.